

HAKOBI NEWS

INFORMATION

8月～11月の事業のご案内

特 別 展

■ 極東ロシアのモダニズム 1918～1928

～ロシア・アヴァンギャルドと出会った日本
7月16日(火)～9月1日(日)
ロシア未来派を中心にした極東ロシア
の美術を、ウラジオストク、ハバロフス
クの美術館・博物館の所蔵品によって
紹介するとともに、その影響を受けた
日本のモダニズム美術を検証します。



N・ナウモフ《二つの世界 古いものと新しいもの》1925年

■ 聖母子と子供たち

9月10日(火)～10月27日(日)
ルネサンスから近代に脈々と描き続け
られた聖母子像をはじめとして、母と子
の愛情をテーマとした多彩な表現による
作品を紹介します。クラナハ、ヴァ
ン・ダイク、ルーベンス、ムリーリョ、ブ
ーグローなど、ヨーロッパの代表的な
作家を含むポーランドのヨハネ・パウロ
2世美術館のコレクション約57点により
構成されています。



アニーバレ・カルラッチ《聖母子》

■ 道南の書の歩み

11月3日(日)～12月22日(日)
当館では毎年書の展覧会を開催してい
ますが、今回は地元道南地域に焦点を
当て、北海道でもっとも長い歴史とと

もに息づいてきた書のすがたをたどり、
近世から現代へと続く道南の書を検証
します。 <フロントページ参照>

MUSEUM COLLECTION

■ SUMMER

7月16日(火)～10月27日(日)
【常設展示室】
・田辺三重松の函館時代
60歳で東京に転居するまで当地を拠
点に活動した田辺三重松の作品を「函
館」をキーワードとしながら紹介します。
【鶴亭記念室】
・書家・鶴亭の歩んだ道

昨年惜しくも逝去した金子鵬亭の作品
を、追悼の意味を込めて年間を通して
展覧する2期目として、今回は鶴亭の
初期から最盛期までをみていきます。

EVENING

アートコミュニケーション セレクションⅤ
「デメーテル に寄せて」
帯広で開催中のとかち国際現代アート
展『デメーテル』に連携し、出品アー
ティストについての/によるアートコミュ
ニタリー 3本をシリーズ上映します。

- 8月3日(土)
「オノ・ヨーコ」
1999年イギリス映画 52分
出演:オノ・ヨーコ他
- 8月10日(土)
「KAWAMATA PROJECT BY GILLES
COUDERT」
1994・97年フランス映画 71分
出演:川俣正他
- 8月17日(土)
「STEP ACROSS THE BORDER」
1987・90年ドイツ映画 90分
監督:シネ・ノマド

各回PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

美術映画会
「書と漢字の歴史」
書と漢字の歴史をその始原からたどり
やさしく解説したシリーズを毎月一本

づつ上映しています。

- 8月24日(土)
「王羲之と蘭亭序」
 - 9月21日(土)
「東晋 王羲之に続く書家たち」
 - 10月19日(土)
「北魏 造像記」
 - 11月16日(土)
「隋 楷書の完成」
- 各回PM2:00～(各回約40分)
会場:当館講堂 <入場無料>

「極東ロシアのモダニズム 展ミュージアムシアター」
「戦艦ボチョムキン」
1925年ロシア映画
セルゲイ・エイゼンシュテイン監督
日時:8月31日(土) PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

- 「聖母子と子供たち」美術講演会
「母のイメージ・子のイメージ:
聖母子、子供、家族の表現」
講師:芳野 明氏(弘前大学助教授)
日時:9月14日(土) PM2:00～
会場:当館講堂 <聴講無料>

- 「聖母子と子供たち」特別展セミナー
「近代絵画に見るマリアとキリスト」
講師:当館学芸課長・柴 勤
日時:9月28日(土) PM2:00～
会場:当館講堂 <聴講無料>

「聖母子と子供たち」ミュージアムコンサート
「私のお気に入り・アカベラひととき」
演奏:アンサンブル・モジエ
日時:10月5日(土) PM2:00～
会場:当館ホール <整理券制>

「聖母子と子供たち」ミュージアム・シアター
「フランダースの犬」
1998年アメリカ映画 日本語吹替 96分
日時:10月5日(月) PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

- 「道南の書の歩み」美術講演会
日時:11月3日(日) PM2:00～
会場:当館講堂 <聴講無料>

芸術週間ミュージアム・シアター
日時:11月4日(月) PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

- 芸術週間ミュージアム・サロン
学芸員とお話してみませんか。各
学芸員の専門領域を中心とながら、
みなさんの美術に関する疑問、珍問、
不満にお応えしていく対話型のイベ
ントです。
日時:11月5日(火)、6日(水)、7日(木)
PM2:00～
会場:当館講堂 <参加無料>

- 「道南の書の歩み」特別展セミナー
日時:11月3日(日) PM2:00～
講師:当館学芸員 齊藤千鶴子
会場:当館講堂 <聴講無料>
*これらの予定はすべて変更の可能性があ
ります。詳しくは展覧会チラシなどにてご確
認くださいますようお願いします。

ボランティアからのお知らせ

新人もひとりたち
欠員補充による募集を受けて4月にまた大量の
新人が入会しました。新人研修、各部の実施研
修を経て、徐々に独り立ちしてきました。これか
らが楽しみな夏の風景です。

美術館からのお知らせ

8月から11月は下記の印の日が休館となります。
・定期休館日の月曜でも、祝日もしくは振替休日
と重なる場合は開館します。

8	日	月	火	水	木	金	土
	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31			

9	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	
8	9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30	

10	日	月	火	水	木	金	土
	6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					

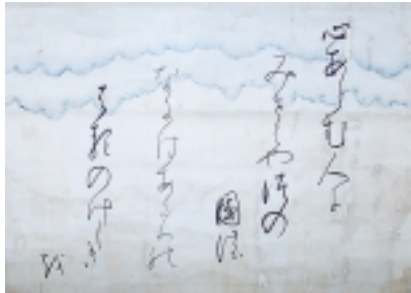
11	日	月	火	水	木	金	土
	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31		



松前章広 市立函館博物館蔵



金子鵬亭 自作句「漂渺の気流」1978



松前慶広 市立函館図書館蔵

道南の書の歩み

11月3日(日)▶12月22日(日)



松浦武四郎・賴三樹三郎『一日百印百詩』1911 市立函館図書館蔵

COLUMN 書って、美術なの？

美術館にみえるお客様から「書は読めないし、見方がわ
からない」といった声を聞くことがあります。これは、毛筆を
主要な筆記具としていた時代には最大のメディアであった
書が、読み方や見方の手引きを必要とする「美術」へとす
っかり変貌した証拠でしょうか？そもそも日本で初めて翻

訳語の「美術」が使われたのは明治5年。当時、政府が定め
た「美術」の範疇に書は入っていませんでした。明治も後半、美
術界の盛況に対抗して「東洋美術」の振興を唱える書家が現れ、大
正期には新進の書家が「書の芸術化」を標榜、書壇の形成が始まります。電子機器
上で文字を「整理」する現代、ようやくその悲願がかなったのかも知れません。(CS)



比田井天来「七言对句」風翻 1933

「ソニア・ドローネ展 - La Moderne」2002.4.6-5.19

現在も全国を巡回しているソニア・ドローネ展は、本格的な個展としては日本初、また夫ロベール・ドローネとともに紹介された東京国立近代美術館での展覧会からも既に20年以上が経過しています。日本ではまだまだ知名度の低い画家ですが、同時代やその後の抽象芸術には決定的な影響を及ぼしているのです。

ソニアがウクライナの寒村に生まれたのが1885年、その後ドイツでの勉強を経て20歳の時にパリへ出、第一次大戦前後から画家として旺盛な制作活動を展開したその足取りは、エコール・ド・パリの画家たちの歩みと完全に重なります。ただ、彼らと決定的に異なるのは、ソニアが常に前衛的な芸術活動の中心にいたということです。パリに到着した1905年は、まさしくフォーヴィスムが



誕生した記念すべき年。その後キュビズムが現れ、第一次大戦中にはダダイズムがヨーロッパを席卷しますが、ソニアとロベールはそうした前衛芸術を担う画家や評論家、詩人たちと交わりながら、自分たちの様式を生み出していったのです。

オルフィズムとも呼ばれる鮮やかな色彩と円を連ねたリズムカルな形態による作品は、それまでにない全く独自の様式を示すものです。二人を最初に注目したのが、キュビズムに湧くバリの美術界よりも、抽象絵画の父と呼ばれるカンディンスキーなどドイツの「青騎士」の画家たちであつたことも興味深い事実です。本展の展示構成は、こうした様式の成り立ちから発展、確立する過程をうかがうことができるものでした。さらにもう一つの特色は、デザインに関わる多数の作品が会場を埋めたことです。もとよりソニアは、デザイナーとしても世界的に知られています。舞台衣装にはじまり、テキスタイル、室内装飾、家具、本の装丁、服飾など、それは生活のあらゆる分野にまたがっています。その典型的なものとして、服飾のデザイン集やタピスリー、スカーフ、トランプなどが出品されましたが、ドローネの芸術を見る上で、この半世紀以上にわたるデザイナーとしての活躍を見逃すことはできないでしょう。本人自身が述べていたよ



うに、ソニアの中では純粹美術と応用美術の区別は意味がなかったということは、本展を一瞥しただけでも理解していただけたと思われます。

本展に関連して開催された講演会で、和光大学の竹原あき子教授が興味深いパリの最新動向を紹介してくれました。それは、美術史の上ではロベールの陰に隠れがちなソニアですが、ポンピドゥー・センターにある国立近代美術館の展示構成から見る限り、両者の位置づけに変化、すなわち逆転現象が現れている、というものです。これはソニア・ドローネのいわば復権が行われる兆候であり、今後の研究や紹介のし方にも反映すると思われます。期せずして企画されたものですが、本展はその先駆けとも言えるでしょう。

(学芸課長 柴 勤)

新収蔵作品展 - ホルツァーを中心に



前年度は、函館ゆかりの日本画家・野田九浦の「香妃出獵」とジェニー・ホルツァーの電光掲示板の作品の購入に加え、北海道における仮名書の代表的普及者・松本春子の書作品5点、さらに終生函館を拠点に活動した天野宮蔵の油彩画1点の受贈作品を含めて、計8点の作品を収集することができ、7月7日まで常設展示室で新収蔵品展として紹介しました。中でもジェニー・ホルツァーの作品は、数年来の検討の末に、当館の収集方針である「文字記号に関する現代美術」には不可欠の作品として収集されました。

今回収集した作品は、ホルツァーが1993年から1998年にかけて発表した「Lustmord」「Erlauf」

「Arno」「Blue」という4つのテキストが流れるようになっています。彼女の作品は文字の側面よりも言語的側面の方が大きいことから、タイトルも邦訳し、それぞれ「Lustmord」を「暴行殺人」(水戸芸術館での展覧会の時に訳出)、「Erlauf」を「走奪」(ドイツ語の造語を受けて邦訳でも造語した)、「Arno」を「アルノ川」(フィレンツェのアルノ川でのプロジェクト)、「Blue」を「青」(「ブルー」としたままの日本での発表例もあり)としました。もちろんテキストそれ自体も観覧者の心情にダイレクトに届くよう日本語で流れてくるのが理想的なのですが、米国で制作された本作では英文のみです。これを補うために展示室には常に翻訳文を用意しました。レイプ殺人を犯す男性の犯人と、屈辱を負ったまま殺されていく被害者、またそれを助けられないままに傍観せざるを得ない被害者の子供もろしく目撃者の3者の視点から犯行のシーンを執拗なまでに叙述した「暴行殺人」は、その内容の過激さ故に翻訳文だけを見た観覧者からの苦情があつたほどでした。

ホルツァーのテキストが、「権力の濫用は驚くほどに値しない」「あなたもひとつくらいは大

きな情熱を持つべきである」などといった短い衝動的なアフォリズムを並べた作品から徐々に、私意識に近接した具体的かつ詩的な作品に変化していったのはよく知られていることですが、本作品の「暴行殺人」以降のテキストでは、さらにそこから人間存在の暗部に迫るようなシュールリアリスティックな要素をもつテキストに変化していきます。とりわけ彼女の母親としての実感に根ざした多少ペシミスティックなひらめきは、各テキストを根本から支える重要な要素になっています。

また、この作品にとってとりわけ印象的なのは、テキストごとに流れてくる文字の意匠が変えられていることです。青地にやや平体のかかった文字がプリंकしながら現れる「走奪」や、書体の変えられた同じテキストや輪唱のようにやや時間をおきながら同時に流れてくる「青」など、いずれの視覚的工夫もテキストの、言葉としての訴求力を増すように仕組まれているのです。新収蔵品展としてはすでに終了していますが、またの展示の際にもぜひ体験していただきたい作品です。

(主任学芸員 穂積利明)

美術館の七変化 ~ 展示室とともに ~

非常勤主任・三浦伊織



函館美術館オープン以来、受付・監視業務をとおり、直接お客様と接する仕事に携わって参りました。開館当初は何もかもが初めてのことで、16人の職員が力を合わせ手探りの中で試行錯誤しながら美術館づくりに励んでいたことが懐かしく感じられます。発券が追いつかないほどの入館者を迎え、にぎわいを見せていた函館美術館も、今では本来の美術館の静けさを保ちながら16年目の落ち着きを醸し出しているかのように思えます。「今日は体調がいいので、久しぶりに見に来ました。」そう言っている方もポケットの中からあめ玉をくれるおじいさん、「最近少し太ったかな?」と気軽に声をかけてくれる常連さんなど、最近では根強い美術館ファンとともに、道南地域の美術の殿堂としての役割を担いながら、美術館は変化を繰り返して来ましたが、ミュージアムコ

ンサートにおける整理券制についても、昨年までは当日のみ配布していたものを、本年度より一週間前から配布できるようになったことも、お客様のニーズにお応えできた美術館としての変化の勝ち取りとも言えましょう。

さらに、この展示室も学芸員の魔法によって様々な七変化を繰り返しています。「さくらに見る日本の美展」では、絢爛豪華な桜の美しさが展示室いっぱいに広がりお花見気分を楽しめましたし、「マジカル・アート展」では展示室がほんとうに魔法の国へと変身。また中世ヨーロッパ絵画の展示になると雰囲気は一変して厳肅かつ重厚な美術館へと変化します。アandesの染色やアフリカ彫刻などでは、ちょっとした世界旅行を楽しめるなど、同じ展示室の中でもこんなに雰囲気が一変します。

長年展示室の七変化を見てきた私にとっても、多くの美術作品と人との出会いの中で、自分自身が成長できたことが私の変化といえるとともに、つくづく幸せ者だなあ..と思えてなりません。ふと思うと、見に来られるお客様にもいろいろな方がいらっしゃる。見方も違ふし、受けとめ方もそれぞれ...そんなお客様の心の色・心の七変化を受けとめながら、作品をとおして感性や精神性の心の世界をひろげていただき、「来てよかった」と思っているだけで、そんな笑顔とサービスを心掛けていかなくは、そして地域とともに歩むべく函館美術館はこれからも時代とともに変化し続ける...そう思ったある日の展示室からでした。

海を渡った蠣崎波響



ブザンソン 1996年

松前藩の家老・蠣崎波響の代表作に、12人のアイヌの首長を描いた《夷酋列像(いしゅうれつぞう)12点組》がある。そのうちの11点が、何とパリの南東約400キロメートル、スイス国境に隣接する小都市ブザンソンの美術考古館で1984年に発見されたのである。それまでは市立函館図書館の2点が知られていたに過ぎなかったのだが、それらとは別に描かれた一組が、それもほぼ完全な姿で現れたものだから反響は各方面から沸き上がった(ちなみに、12点の全貌を知る手がかりとしては、小島貞喜が1843〔天保14〕年に描いた模写[札幌の北尾家所蔵]が残されている)。新聞やテレビの取材をはじめ、評伝、伝記の刊行も相次ぎ、4年後の1988年、丸井今井函館支店で開催された「謎を秘めた幕末期の函館 夷酋列像里帰り展」では函館本と初顔合わせをし、1991年の「蠣崎波響とその時代」展では函館美術館を皮切りに全国の美術館で紹介された。

さて、この一組の《夷酋列像》、どうして日本とは縁もゆかりもないアルプスの麓にまで運ばれたのだろうか。まさしく 謎を秘めた 作品であるのだが、この点に関し、先の「里帰り展」で講演をしたブザンソン美術考古館のフランソワーズ・フランソワ＝スーリエ氏は、カリックの宣教師エマニュエル・メルメ・デ・カシオン神父が介在していた可能性を示唆している。カシオン神父は、1859(安政6)年から4年間にわたり函館に滞在、フランス領事館

書記も兼ねながら、元町カトリック教会の礎を築いた人物である。世話好きで評判が良く、フランス語を教えたり病人治療にも尽力した、と事典にはある。函館を去った後は、フランス公使レオン・ロッシュの相談役兼通訳として公使と將軍徳川慶喜との間を取り持ち、また横浜仏蘭西語伝習所の学長となるなど幕府と極めて近い立場にあった。1867年にはパリ万博が開催され、徳川幕府を代表して慶喜の弟、徳川昭武が参加したが、それに随行した若い士官たちの多くはカシオン神父の元生徒であつたという。さてこのカシオン神父、函館時代にはアイヌに情熱を持って接し、『アイヌ語辞典』という著書もあるくらいだから《夷酋列像》に関心を持ったとしても不思議はない。その来日前の任命地は、ブザンソンと同じジュラ県にあるサン・クロード司教区であり、さらにパリの海外伝道協会の神学校で共に学んだP.デュカ神父という人物の兄弟が、後にブザンソン美術考古館の学芸員となっているのである。すなわち、もしもカシオン神父が幕府や函館の関係者を通じて《夷酋列像》を入手したとすると、神父を通じてブザンソンに渡った可能性は、にわかに現実味を帯びてくるだろう。

こでさらに二人のフランス人画家にも触れておこう。まずはパリやロンドンで人気を博したジェームズ・ティソ。パリ万博の翌1868年、昭武の「畫學教師」に任命され、8ヶ月にわたり絵画の手ほどきをした(この間、ティソは水彩画《徳川昭武の肖像》を描いている)。ティソはジャポネズリー(日本趣味)の画家として、また日本美術収集家としても著名であつたから、もし《夷酋列像》の存在を知っていたら当然強い関心を持ったことだろう。しかも彼が最後を過ごしたシャトー・ドゥ・ピュイヨンは、これも偶然かブザンソン近郊にあつたのである。そし



《夷酋列像》「賢吉諸議(ツキノエ)」 ブザンソン美術考古館蔵

て二人目は、パリで活躍したブザンソン出身の画家ジャン・ジグー(1806~89年)。ブザンソン美術考古館のデッサン・コレクションはフランス国内でも有数であるが、ほとんどはジグーの寄贈によるものであり、その中に《夷酋列像》も含まれていた可能性が高い、と前出のフランソワ＝スーリエ氏は指摘している。

それぞれブザンソンに関わりを持つカシオン神父、ティソ、ジグー。そして、松前藩、徳川幕府、パリ万博。それらを結び糸は、これまでのところ推測、憶測の域を越えるものではない。恐らくは幕末の混乱した時代に、さまざまな思いを載せて海を渡った《夷酋列像》。松前からブザンソンへ辿り着くまでに、一体どれほどの人の手を通じたことだろう。今後の展開を大いに楽しみたい。

亀谷隆氏(北海道開拓記念館) 井上研一郎氏(宮城学院女子大学) 五十嵐聡美氏(北海道立釧路芸術館)のご協力を得た。ここに記して感謝したい。

(学芸課長 柴 勤)